

浮遊する追憶

Digital Art
Exhibition in
BiVi Shin Sapporo

デジタルアート展
in BiVi 新さっぽろ

重力の反転する音と機械

2024.10.12 [土] ~ 11.8 [金] 18:00~23:00

BiVi 新さっぽろ 2階
(札幌市厚別区厚別中央1条6丁目) BiVi PARK 天井LEDパネル

計算機自然が織りなす新たな知覚の地平に立ち、我々は重力という普遍的な力の再定義に挑む。本作は、アイヌ神話に登場する空飛ぶ神々の自由な想像力に着想を得て、現代のデジタル技術が自然と融合し漏出する場を創出する。LEDという新しいデジタルの鏡と生成AIの協奏により、重力の概念は流動的となり、音と光の律動は物理法則の境界を押し広げていく。観客は、通常の重力から解き放たれた空間に身を置くことで、自然と人工知能、現実と仮想の境界が溶解していく様を体感する。この作品は、単なる物理現象の視覚化を超え、我々の感觉や記憶、そして存在そのものを再構築する試みである。浮遊する物体の動きは、我々の内なる追憶を呼び覚まし、データ化とインタラクションによって重力に縛られない新たな自然観を紡ぎだす。その上で音は、この反転した世界で新たな意味を持つ。それは重力の代替として空間を構築し、見えない力の存在を可聴化する。

本インスタレーションは、計算機自然という新たなパラダイムにおいて、存在の多様性と相互連関性を探求する。それは、人間中心主義を脱し、万物の絶え間ない生成変化の中に逍遙遊する、現代の風景である。

我々は、この作品を通じて、デジタル時代における新しい公園のあり方を提示する。それは、重力という物理的な制約から解放された想像力の遊び場であり、同時に、我々の知覚と存在の本質を問いかける哲学的な場でもある。

「浮遊する追憶」は、過去と未来、自然と人工、物質と非物质が交錯する地点に立ち現れる。そこでは、重力の反転は単なる物理現象ではなく、我々の世界認識の根本的な転換を象徴する。この作品は、計算機自然がもたらす新たな美学と存在論の探求であり、観客一人一人が自らの「重力」を再定義する旅への誘いである。

Yōichi Ochiai

落合陽一

soichiro

2024
10.12 [土]

落合陽一 第一部
特別講演会 定員 150名

デジタルネイチャーと 未来の社会

デジタルネイチャー化の進展と
高速で変遷する技術環境
in 札幌

[時間] 13:00～14:30 開場 12:30／終了時刻予定

[会場] カナモトホール 第1・2大議室
(札幌市民会館)

デジタルアート展 第二部
in BiVi 新さっぽろ
開幕イベント 座席 80席

浮遊する追憶

重力の反転する音と機械

[時間] 17:30～18:15

開場 17:00／終了時刻予定
※デジタルアート展は2024年11月8日(金)まで
開催いたします。

[会場] BiVi 新さっぽろ2階
BiVi PARK 天井LEDパネル
(札幌市厚別区厚別中央1条6丁目)

ゲストMC
2023ミス日本グランプリ

吉岡恵麻

「ながらへばまたこの頃やしのばれむ憂しあと見し世ぞ今は恋しき」
小学生の頃に出会ったこの和歌一首に込められた思いや世界に魅了され、古典の魅力を世に広げたいとキラキラした目でお話する大学4年生です。

幼稚園のときからテニスに夢になり、10歳でロサンゼルスに海外遠征をするほど打ち込みました。高い身長を活かした運動神経にも自信があります。ミス日本コンテストの勉強会の中に、日本で一番古い能の金春流の櫻間家第21代当主の櫻間右陣先生による直接講義に興味を持ち、ミス日本に応募しました。

尊敬する女性は、元衆議院議員の金子恵美さん。朝日放送ABCテレビでのアルバイトの際に出会い、優しさと芯の強さを両立した美しさに憧れています。将来の夢は古典の魅力をより多くの方に知っていただくこと。そのためにもまずは正しい日本語をマスターしたいと思い、アナウンサーを志しています。



札幌から

～未来へつなぐ環境・文化・人の輪～

広がる

入場無料
事前登録制

未来の

BiVi
SHIN-SAPPORO

カレチャーと 人のつながり

©Jun Sugawara

落合陽一

講師
メディア
アーティスト

メディアアーティスト。1987年生まれ、2010年ごろより作家活動を始める。境界領域における物化や変換、質量への憧憬をモチーフに作品を展開。筑波大学准教授。2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)テーマ事業プロデューサー。主な個展として「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs」(北九州、2021)、「Ars Electronica」(オーストリア、2021)、「晴れときどきライカ」(ライカギャラリー東京、京都、2023)、「即は計算機自然: 符号化された永遠、オブジェクト指向本願」(岐阜・日下部民藝館、2023)、「即は寂の瞬間は寂の即は騒」(Gallery & Restaurant 舞台裏、2024)、「昼夜の相代も神仏: 鮎即は蟻即は蝶」(東京 BAG-Brillia Art Gallery、2024)、「どちらにしようかな、即の神様の言うとおり: 円環・曼荼羅・三巴」(岐阜・日下部民藝館、2024)など多数。また「落合陽一×日本フィルプロジェクト」の演出など、さまざまな分野とのコラボレーションも手掛ける。

WEB 申し込みはこちら→

